

俺のフラグは よりどりみデレ

栗栖ティナ
挿絵／火曜



立ち読み版

◎ 登場人物紹介 ◎



さくら こうじ し おん

桜小路詩音 【属性】お嬢さま、大和撫子？

転校初日に遠人が出逢った美少女。遠人に一目ぼれて迫ってくるのだが？



ひびき み お

響美緒 【属性】ツンデレ、幼馴染み？

遠人の幼馴染みの活発な少女。通称「デレのないツンデレ」。



すおう あい か

周防藍花 【属性】クール？

いつも静かに本を読んでいるクールな少女。遠人の隣の席。



はぎ の みどり

萩野翠 【属性】女教師、ママ？

聖エスタド学園の学園長。遠人とは遠縁の親戚という関係。



こ ばやし じ ゃ り

小林樹里 【属性】ヤンキー？

詩音を襲っていた不良少女。一匹狼な空気を漂わせている。



みや した と も こ

宮下智子 【属性】委員長、メガネ？

クラスの委員長。みんなのまとめ役を務めている。



なな み え り な

七海絵里奈 【属性】ぶりっこ？

同じクラスの女の子。明るくてムードメーカー的存在である。



すず むら り ょ う と

涼邑遼人

本作の主人公。知らず知らずフラグを立ててしまう体質の持ち主。

わずか三十分ほど前に道ばたでぶつかった少女と、唇を重ねている。

恋に縁遠い青春を送ってきた遼人にとつて、先ほどの怪物以上にありえない現実。

「はんっ、はあっ、遼……くんっ、あふっ……」

唇の隙間から漏れ出す熱く掠れた囁きが、場の雰囲気を一層盛り上げてくれる。

漂う苺のような爽やかな香りが、蜂蜜を溶かし込んだような濃厚なものへ変わってきていて、呼吸をする度、身体の内側からも尋常ではない興奮が込み上げてきた。

（やばい……熱くて、甘くて、気持ちよくて……お、おかしくなりそうだ）

改めてそう実感していた少年の耳に飛び込んできた、パサリという物音。

同時に押し当てられた、むにゅりと潰れる覚えのある感触。

倒れた拍子にボタンが外れてしまったのか。詩音のブレザーとブラウスの前がいつの間にかはだけ、その下に隠されていたものが零れ落ちてしまっていた。

薄桃色の上品なブラジャーに包み込まれたふくらみは、先ほど触れた時に想像したとおり、目を見張るサイズ。

少し下へずれたカップの端から飛び出す、色づいたばかりのチェリーにも似た乳首。

そのこの辺りが覆いかぶさる胸板へ、軽く触れてしまっていた。

「えっ、あつ、ご、ごめん！俺、わ、わざとじゃないんだ!!」

さすがに流されたままではいられず、上体を大きく仰け反らせて謝る。

キスだけならともかく、これは詩音にとっても想定外のトラブルのはず。せつかくの雰
囲気が一発で台なしだ。

（ああ、もう！ どうして俺は、大事なところでいつもいつも!!）
どうして一緒に倒れただけで、こんなことになってしまうのか。
どう考えても普通ではありえない。

「……どうぞ。私……大丈夫ですから」

頭を抱えたい気分になっていた少年へ、組み伏せる美少女が頬を赤らめ、想像の斜め上
の言葉を囁きかけてきた。

「だ、大丈夫？ それ……え……」

「優しく……してくださいね」

その言葉と共に、首に回された二本の腕の力が強くなる。

踏ん張ることもできずに引き寄せられ、対の肉球が楕円に潰れてしまう。

服越しに伝わる弾力に生唾を飲む間もなく、今度は股間の辺りに何かモゾモゾと動く感
触が伝わってきた。

うつむいて確かめようとした刹那、ヌチュリという音と共に熱く濡れたものが、身体で
一番敏感な場所に触れる。

「……あんっ！ ふあっ、くう……んあ」

「うっ、えっ、これ……っ?!」

弛む乳房越しに、どうにか下腹部を覗き見た瞬間、少女の口からうっとりとした甘いため息が漏れる。

引き下ろされたズボンのファスナーから、ポロリと飛び出した屹立^{きつりつ}。

それが、倒れた時に軽く捲れたのであろう少女のスカートの中——ブラジャーと同じ桃色ショーツの脇へ密着してしまっていたのだ。

蕩ける甘いキスに酔い、自分でも驚くほど硬くそそり立った陰茎。その先端の赤黒い龟头が突いているのは……色素の薄い、肉唇の端。

「なっ、うっ、嘘!! これ、いや、違う違う! ない、こんなの!」

うるたえ、自分でもよくわからないまま支離滅裂な悲鳴を上げる。

どうしてこうなったのか理解不能な体勢と、乱された服装。

必死に身体を離そうとするが、絡みつく詩音の手足の力は想像以上で、なかなか振りほどくことはできない。

「ごめん、わざとじゃない! だから、その、えっと、えっと……」

「……ふぁう……もう、大丈夫です、このまま……きてください」

泣き顔で言い訳を並べた少年を見上げ、ポツと火がついたように頬を赤らめた黒髪の美少女が呟く。

「このままって、え、えっと……」

意味を理解できずに凍りついた遼人へ、更に具体的な言葉が続けて投げかけられた。

「遼くん……王子様のためのものですから。私の全部……もらってください」

エッチして欲しい。

極めて単純な言葉に脳内で変換し、改めて事の重大さに目を丸くする。

「で、でも、その！ いや、そんなっ！ 無理無理！ 絶対、無理！」

一目で心奪われる美少女からの、魅力的な誘い。

だが、それを二つ返事で受け入れられる豪胆さを、散々不運に見舞われてきた遼人は持ち合わせていなかった。

「だつてさ、ここ外だよ!! それに詩音とはさつき会ったばかりじゃん!! ……そういうことは、もつと時間をかけて……それに、そこに倒れてる子も、病院へ運ばないと！」

「ふふっ、大丈夫ですよ、遼くん。何も……問題ありませんから」

少年が並べた説得の言葉を、詩音は一片の曇りもない微笑みで軽く流してしまった。

「私の気持ちは固まっています。それに……邪魔者が近づいてくることはありません。そういうことに、なっていますから」

そこで言葉を止めた詩音は、不意に先ほどまでの無表情へ戻り、未だに小さく寝息を立てて倒れている樹里を一瞥する。

「彼女……小林こばやしさんのことも、心配いりませんよ。あと半日はあのまま眠り続けているはずです。それに……遼くんが私が結ばれることが、彼女のためでもありますから」

「な……何で？」

「だって……こうして私と王子様が結ばれる、橋渡し役を買って出てくれたんです。その好意を無駄にしたら、申し訳ないと思いませんか？」

見つけているだけで何故か背筋が震えてしまう、無邪気な微笑と共に放たれた台詞。

この子は一体何を言っているのか。意味が何も理解できずに戸惑っていると……今まで少女の顔に浮かんでいた恍惚の微笑みが、不意に消えてしまった。

「それとも……ダメですか？ まさか……私の心を弄もてあそんで、からかう……そういうつもりで助けてくれたわけでは、ありませんよね？」

真っ直ぐに見つめてくる深い色の瞳から光が消え、凍るような冷たさを漂わせる。

先ほどの怪物から感じた以上の、底知れぬ恐怖。

遼人はガクガクと背筋を震わせながら、必死になって首を横に振って答えた。

「ち、違う！ そんなつもりじゃないって！」

「……そうですね、私の王子様が……そんな酷い方なはず、ありませんから」

そんな呟こわはきに合わせ、瞳に再び優しい光が戻る。

強張こわはっていた頬も緩み、まるで薔薇の花のような美しい微笑みが浮かぶ。

今、感じていた威圧感は、何かの勘違いだったのか。そう思ってしまうほどの美しい笑顔に見とれつつ、遼人は更に言葉を続ける。

「むしろ、大事に思っているから……ほら、勢いでしていいことじゃないし……」

「……その気持ち、とつても嬉しいです。でも……大丈夫ですよ」

「で、でも……んあつ、くうっ！」

詩音の呟きに合わせ、組み伏せる身体が悩ましく左右に揺れる。

張り詰めた亀頭がぶつくりとした大陰唇に擦れ、その甘い刺激で腰が痺れてきた。

（ほ、本当にいいのか？ こんなチャンスでもなかったら、一生童貞卒業できないかもしれないし。でも、さすがに……）

初体験は、夜景の綺麗なホテルの部屋で恋人と。そんな乙女じみた理想は持っていないが、それでも初めてというものにはそれなりに憧れがある。

「……これは、今、すぐにしなければいけないことです。苦難を乗り越えた王子様とお姫様は、必ず結ばれる……それが物語の定めなのですから」

——それを破れば、先にあるのは悲劇だけ。

いつまでも決断できないでいる少年へ、詩音がそう消え入りそうな声で呟いた直後。その意味を問いただす間もなく、首に回された手の力が一気に強まった。

——ニチュリ。

少年の身体が大きく前へ倒れ、自然と腰が突き出される形になる。

硬く勃起した屹立が、湿り気を帯びたショーツの股布を横へ押しつけ、先ほどから執拗に擦れていた肉唇の中央へ滑り込む。

じゅわりと熱いものが染み出てくる、粘膜の感触。

肉を押し分ける低い音と亀頭を包む圧迫感は……少女と一つになろうとしている証。

「うあっ！ ダメ……こ、これ以上は洒落に——」

「嬉しい……遅くん、そのまま……んっ、ああんっ！」

——ズブズブッ、ミリイッ、ズップウウウッ！

腰にまで響く、何かを押し裂く振動。一気に根元まで降りてきた、熱い締めつけ。

嬉しそうに声を上げた詩音が自ら腰を押しつけ、屹立を奥まで迎えたのだ。隅々までをねっとり包み込む未知の感覚に身体を震わせながら、その事実を把握する。

「詩音……うあっ、くうっ！」

「んぐっ、はあはあ……いつ……ああ……」

見下ろす少女の微笑む顔がぎこちなく歪み、少し色の濃くなった唇からは切羽詰まった荒い吐息が零れる。

うつむき結合部を確かめると、わずかに赤いものが滲んでいるのが見えた。恐らくそうだろうとは思っていたが、この美しい黒髪の少女もこれが初体験なのだろう。

それがどれだけの苦痛を伴うことなのか、男の遼人には理解できない。

だが、屹立が押し潰されそうな狭い肉穴を無理矢理押し広げられているのだ、尋常の痛みでないことだけは想像できた。

「嬉しい……です。遼くん……王子様にあげられて、幸せ……はふっ……」

だが、戸惑う少年が大丈夫なのかと気づかうよりも早く、瞳に涙を浮かべて微笑む詩音が、歡喜に震える声を上げた。

腰をピクリとも動かしていないのに、竿の隅々がざらついた感触に擦られる。

少女の膺壁が、自分を歓迎するように波打っているのだろうか。

押しつけられた乳房を飾るニプルも胸板に食い込むほど硬く尖り、その巨大なふくらみの奥からはトクトクと昂りを訴えるような速い鼓動が伝わってきていた。

「はあはあっ、んっ、優しいですね、遼くん。私に遠慮して……動かずに、我慢してくれているのですか？」

「くっ、ああっ、い、いや、そういうわけでも、その……」

「大丈夫です。遼くんが苦しい思いをする方が、私は悲しいですから……遠慮なく、私の中で気持ちよくなってください。ど、どうぞ……はんうっ、ああっ……」

グチュルッ……又チュッ……。

途切れ途切れの声と共に、意図的なのか震えのせいなのか、詩音の身体が小さく上下に

揺れ始めた。

ブラジャーが乳肉の下までずれ、ほとんど零れたお碗型のふくらみが胸を擦る。

グニヤリとパン生地のように柔軟に形を変え、触覚と視覚両方で興奮が高まっていく。

（おっぱいって、どうしてこんなに柔らかくて気持ちいいんだよ……やばい、もう俺、何が何だかわからなく……）

混乱する少年の心が、肉棒の先を断続的に走る刺激で更に翻弄される。

短い振り幅で狭い腔道を往復する動きに合わせ、張り出す肉傘が壁面の蠢く皺うごめに弾かれていたのだ。

「きて……きてください。遼くん。……どうぞ、感じて……」

駄目押しとばかりに、何度も繰り返し吐かれる甘い誘いの言葉。

そうでなくても目まぐるしい展開に麻痺していた理性が、いつまでも持つはずがない。

「うっ、ああっ、もうっ、俺、俺っ！」

ズブツブツ、ジユブツ、ズブズブツブツ！

何かに許しを乞うように叫びながら、遼人の腰が貪るような熱心さで抽送運動を始める。

きつく収縮する肉道を広げながら、少しずつ大きくなっていくストローク。

滲み出る熱い滑りを掻き出すように、やがて入口から奥の行き止まりまで隙間なく擦る形になっていく。



「く、苦しいかって聞かれたら、まあ少しは……」

「だよな……血管がこんなに浮かび上がって、先っぽも少し突いただけで弾けそうだぜ」

「いや、そんなマジマジと見られると、その……」

赤くふくれた亀頭から、陰毛に覆い隠された根元まで。頬を真っ赤に染めたまま、舐めるように眺めてくる樹里の視線。顔が火をつけられたように熱くなってしまふ。

(生き地獄だ、これ……ああ、もう、早く萎め、萎めっ！)

この節操なく勃起したモノが鎮まれば、解放される。心の中で何度も叫ぶが、顔見知りの女の子二人に間近でペニスを観察されるといふ羞恥に興奮し、勢いは増すばかり。

「うわあ……随分動くもんだな、これ。生き物みてえだぜ」

「そうですね。あの、いつまでも見ているだけにはいきません！ 樹里さん、しょ、勝負を始めるとして……まず、どうすればいいのでしょうか？」

キョロキョロと落ち着かない様子で視線を泳がせていた眼鏡の委員長が、赤く上気した樹里の顔と屹立を交互に眺めながら訴える。

「なっ……待て、何でそれを、あたいに聞くんだよ！」

「そ、そう言われても……私はこの腫れを治す方法、知りませんので……勝負を挑もうにも、さっぱり……樹里さんは、ご存知なんですよね？」

「ご、ご、ご存知？ あっ、う、まあ、その……」

智子からの問いかけに、樹里はあさつての方を向いて言葉濁す。

それはこうして積極的に押し倒してきた女の子とは思えない、酷くうろたえた姿。その照れ方が実に愛らしく、少年の鼓動はますます高鳴つてしまう。

「あの……樹里さんもわからないのですか？」

「ば、馬鹿！ これくらい余裕だ！ 男の悦よろこばせ方には自信ある！ ……あたいがどれだけ女らしいか、すぐに証明してやる!!」

ムキになつて叫んだ直後、樹里が垂直にそそり立つ屹立へ右手を伸ばしてきた。払いのけることもできず、硬くふくれた根元の辺りをギョツと握られてしまう。

「な……うあつ!! くつ、ううっ!!」

「本当にカチカチだな。それに、無茶苦茶熱いしよ……」

硬さを確かめるように、絡んだ五本の指が緩急をつけて竿を圧迫してくる。

想像していたよりもずっと柔らかく、じつとり汗ばむほどに温かい感触。

血の流れが止められそうなくらい掴まれ、頭までジンジンと響いてくる甘い痺れに、遼人は言葉を発することもできなくなつてしまった。

「どうだ、気持ちいいか？ こうして握つて刺激すると感じるもんだよな、男つて？」
緊張したように声を上擦らせながら、樹里は根元を握る右手を上下に動かし始めた。
マニキュアで薄桃色に飾られた指が竿肌に食い込み、表皮が強く引つ張られる。

「ひぐつ、あぁっ！ いっ……つつ、ううっ!!」

芯を甘い痺れが走るが、それ以上に敏感な部分を乱暴に擦られる痛み顔が歪み、思わず悲鳴のような声を漏らしてしまう。

「あの、樹里さん、遼人君が痛がっていますけど……強くしすぎているのでは？」

「へっ？ そ、そうか？ ははっ、そ、そうか。ヘタレな男のチンコには、あたいの本気はちよつと刺激が強すぎたんだな！ うん!!」

誤魔化すように、必要以上の大声で智子の指摘に答えた不良少女が、慌てて握る手の力を少し弱めてくれた。

「どうだ？ これくらいなら大丈夫だろ？ ほら、さっさとスッキリしまえよ！」

「いや、痛くはなくなっただけど、でも……」

潰されてしまうのではないかとという不安感は消えたものの、ただ根元を軽く擦られる程度の刺激では、甘い疼うずきはそれ以上高まらない。

このありえない状況で緊張しているし、何より乾いた表皮を引っ張られる鈍い痛みうずに、快感を邪魔されている。

「何でだよ！ この……無駄に硬くなってるくせに！」

遼人の反応が鈍いことで、露骨に不機嫌な表情になる樹里。だが、相変わらず手は単純に上下の動きを繰り返すだけ。それ以上、特に何か変わった動きをすることは無い。

「あの……もしよくわからないようなら、遼人君にどうすればいいか聞いた方が……」
「な、何だよ！ あたいが男の一人も満足させられない、駄目な女だつて言うのか!」
「ですが、樹里さん、あまり慣れていらっしやらない……というより、まるで初めてのような感じですし……」

恐る恐るうかがう智子の言葉に、樹里は大きく肩を震わせて動きを止める。

「ぎこちない動きとこの反応から察するに……委員長の指摘は、的を射っていたようだ。
(意外と硬派なのかな、樹里つて)」

バットを振り回して縦横無尽に暴れていた姿と、真つ赤な顔でぎこちなく肉竿を扱とく今の姿のギャップが激しく、思わずにやけそうなくらい可愛らしい。

「何だよ、涼邑も委員長も二人してニヤニヤしやがつて！ とやかく言う前に、委員長も早く動けよ！ あたい達は、『闘争ロツタ』してるんだぜ？ 不戦敗でいいのかよ！」

逆上した癖毛の少女は、少年へ抗議するように肉棒を強く握り締めたまま、横で見学している眼鏡の少女を煽る。

その反応が、今の指摘を暗に肯定していることになることになると気づかないくらい、切羽詰まっ
てしまっている様子。

(止めた方がいいのか？ いや……馬鹿にするなって、ますます怒らせるだけか)

激昂した時の彼女の恐ろしさを嫌と言うほど思い知らされている分、遼人もなかなか言

葉をかけられない。

どうしたものかと、戸惑っている——と。見守るだけだった委員長が、大きく身を乗り出してきた。

「わかりました。私も……初めてなりに、頑張ってみます。ん、ちゅっ……はむうっ！」
「ふえ……ひあっ!!」

不意に亀頭の先に押しつけられた、ヌルリと熱い感触。目を固く瞑つぶった智子が、軽く尖らせた唇を先端へ密着させてきたのだ。

わずかに出された舌先が、鈴口の辺りをチロチロとくすぐるように舐め、滑る唾液が裏筋を伝い、握られた根元の方へと垂れていく。

「なっ……お、おい、委員長！ お前、ど、ど、ど、どこ舐めてるんだよ!!」

智子の大胆な行動に絶句して固まってしまっていた樹里が、一瞬の間を置いて悲鳴に近い声で訴える。

「そうだよ、委員長！ 何で、そんなことを……はううっ！」

奉仕を受ける少年も、屹立の先を這いずる熱い感触に背筋をくねらせながら、樹里の言葉に賛同して首を大きく縦に振る。

いきり立つ剛直を眺めるだけで硬直してしまっていた少女の、予想のはるか上をいく過激な行為。バクバクとおかしなくらい心臓が高鳴り、気が動転してしまう。

「凄く腫れて熱そうでしたので、冷やした方がいいかと……んあつ、はあ、それに擦るにしても、乾いたままではやりづらそうでしたし……」

「だからって、いきなり舐めるのは大胆すぎだろ。き、汚いと思わないのかよ！」

「それは……ですが、これもクラスメイトのためですし……ンツ……それに、そんなに嫌な匂いもしませんから、大丈夫です。ちゅっ、はむっ、んっ、ちゅばあつ……」

矢継ぎ早に問いかける樹里へそう答えながら、智子は口を離すことなく、腫れぼったくなつた先端のあちらこちらへ舌先を這わせていく。

涎がダラダラと垂れ、赤黒い粘膜全体が薄く透明にコーティングされる。甘い吐息を吹きかけられる度、一瞬だけひんやりとした感触が走り、すぐにまた熱い舌で温められる。

「くうっ、うあつ！ 委員長、待つて！ そんな、それ以上……くはあつ！」

大人しく真面目そうな委員長の、熱心な舌奉仕。不意を突かれたその刺激に、少年は身体中の力が抜けていくような、恍惚の快感に襲われる。

顎を少し上げ、途切れ途切れの言葉をつくのが精一杯。竿までヌルリと濡れてしまったおかげで、根元を抜く樹里の手の動きも滑らかにになり、甘美感は際限なく高まっていく。

「どうでしょう？ んっ、痛くはないですよね、遼人君？」

「痛くはない……というか、あの……やばい！ これ以上は……くあつ、ああつ！」

「おい、待ちやがれ！ 二人で好き勝手盛り上がりやがって……こ、このまま負けてたま

るか！ いいぜ、こうなったら、あたかも腹を括くくって本気でやってやるよ！」
一度手を離し、ムキになった表情で叫んだ不良少女が、いきなり自らのシャツのボタンを乱暴に外し始めた。

一体何を考えているのか。それを問いかける間もなく胸元が大きくはだけ、シンブルなスポーツブラも外れて、ポロンと形よい真っ白な双丘が零れ落ちてしまう。

少女の強気な性格を現すように、少し上向きになった釣鐘型のふくらみ。

小さな乳首は、少年の屹立に負けない勢いで硬く尖り、その鮮やかな桃色に思わず視線が吸い寄せられてしまう。

「雑誌で読んだの、思い出しました……確か、こういうやり方もあるんだよな」

樹里は緊張に声を震わせながら、大きく身体を倒してきた。

両手で軽く中央へ寄せられた、プルプルと震える乳房。竿の右側が、その谷間へ軽く挟み込まれてしまう。

「へっ？ あっ、ちよ、じゅ、樹里!？」

「お前の一番好きなこと……おっぱいで、スッキリさせてやるよ。元々、委員長の胸で興奮してこうなったんだし、さっきもあたいの胸をいきなり挿んできたんだ。まさか、嫌だとは言わねえよな？」

有無を言わせぬ強い口調で言いながら、樹里は身体を素早く上下に動かし始める。

「くあつ、んんっ！　そこ……はぐっ！」

自分が今まで触れてきた中では一番強い、空気をいっぱいにしたボールのような弾力を持つ乳房が、垂れる唾液をローション代わりにして竿肌を擦る。

乱暴に手で扱かれるのとはまるで違う、淡く優しい感覚。声を出す度、頭の芯が痺れるような快感が込み上げてきて、情けない声が止まらない。

「はうっ……んっ、樹里さん。さ、先っぽの味が濃くなってきました。少し、しょっぱくて……はふっ、不思議な匂いの……じゅるるっ、んちゅうっ！　これが、男の人の味なんですわね……くんっ、はあ、ちゅんっ、くはあつ、ちゅるるっ！」

舌を細く丸めた智子が、肉幹の先端を突き舐めながら熱い声を漏らす。

樹里の双乳の摩擦に促され、そこから滲み出てくる汁の量がどんどん増えてきていた。透明だった色も段々と白濁してきて、特有のツンとした匂いも強くなっている。

「へへっ、やっぱりおっぱいフェチってやつなんだな、涼邑は。委員長、このままだとあたいの勝ちで決まりだぜ！」

少年の敏感な反応で氣をよくしたのか、樹里が上氣した頬を楽しげに緩めた。

「……んっ、どんどん熱く……ま、負けません、私もお……ちゅっ、はあ……」

煽られた委員長も、癬毛の少女を真似てシャツをはだけさせ、水色のブラジャーを下へずらして双丘をあらわにした。

大きさは樹里と甲乙つけがたい、お碗型の隆起。竿の左側に押しつけられたその感触は、優しい性格を反映したかのような柔らかさ。

「頑張りますね、遼人君。早く楽にしてあげられるように……んちゅっ……ちゅぱっ」

「へっ、意外と積極的じゃん、委員長。いいぜ、んっ……それくらいの方が、勝負が盛り上がる……んあっ、はあふ、んんうっ、くふあっ！」

熱心に身体を動かし、張り詰めた肉竿を慰めようと頑張る委員長。負けん気の強い不良少女もそれに煽られるように、揺さ振る動きを加速させていく。

「ま、待ってくれよ！ そんな、二人がかりでえ……うああっ！」

「へっ、嬉しいか？ 大好きなおっぱいでチンコ挟まれてさ。あたいの女らしさに、もうメロメロってところだろ……ちゅっ、はあ……んあっ……」

喘ぐ少年を上目遣いで覗き見ながら、樹里も竿の先へ唇を押しつけてきた。

既に先走りの透明汁が溢れる鈴口を吸い、硬く張ったカリを舌で弄ぶように舐め弾く。刺激一つ一つに遼人が身体を震わせると、それを楽しむように奉仕は激しさを増す。

「はむうっ、んっ！ どんどん濃くなってきたるじゃん。そろそろ限界か、涼邑？」

「んあ、くんんっ！ もう少しですね……今、治してあげます……はふうっ！」

「ひゃっ、ううっ!? お、おい、委員長！ あたいの胸に押しつけてくるな！ 先っぽが擦れて……はんうっ、ああっ！」



この間の記憶や、年相応に持っているそれ系の雑誌や動画から得た知識を総動員し、恐る恐る唇を重ねていく。

「あむっ、はあっ、んんっ！」

まずは先ほど、美緒がしてくれたような唇を重ねるだけの優しいキス。

唇同士が温もりを分かちあつて綻んできたところで、そつと隙間から舌を差し出す。

まだ硬さの残る蔀色の唇。上と下をそれぞれなぞるように舌尖を動かし、緊張で乾いたそこへ唾液を塗り込み、丁寧に解していく。

「ちゅっ、んっ！ りよ、りようとお……どうして、またキス……んうっ、はんっ！」

「優しくするなら、こうして順々にした方が……嫌？」

「嫌……じゃないわよ。そういうことなら、任せるう……はあふう」

「うん。それじゃ……舌、入れるぜ。あと、こっちもそろそろ」

幼馴染みの口から、熱い吐息交じりで許可を得たところで、濡れた唇の隙間へつるんと舌を滑り込ませる。

すぐ舌尖に衝突する、緊張に縮こまった熱舌の感触。水飴のような甘ったるい味わいを感じつつ、右手を少女の胸元へ伸ばし、シャツのボタンを一つずつ外す。

「やうっ、んっ！ どうして、む、む、胸まで！」

「ちゅっ、はあ……順番だよ。その方がいいかなって……」

「んあつ、ふあつ、はあ、ほ、本当は自分が触りたいだけじゃないでしょうね？ あんた、ここ……好きみたいだし」

ピチャリと舌同士が控え目に絡む水音に混ざり、そんな疑いの声を投げかけられる。
(俺って、そんなおっぱいフェチに思われてるのか?)

昨日も樹里に似たことを言われたのを思い出し、心の中で力なく笑う。

好きか嫌いかと尋ねられたら、間違っても後者とは言えないだけに、遼人は幼馴染みの
眩く声を黙殺し、ボタンをお腹の辺りまで外したシャツをはだけさせた。

「ひゃうんっ！」

重ねる唇の隙間から小さな悲鳴が漏れたと同時に、空色のシンプルなブラジャーに包まれた隆起があらわになる。

服の上から触り確かめた印象どおりの、ほどよい大きさ。

ブラの上からそつと撫で回すと、バクバクと高鳴る鼓動の音がはつきり伝わってきた。

「ううっ、こんなことなら、もっと可愛いブラつけてくれば……っ！ って、な、何であ
たしが遼人のために、そんなサーブスしなきゃいけないのよ!!」

「い、いや、急に怒られても……あの……直接触ってもいい？」

「うっ、す、好きにしなさいって言ったでしょう。一々聞くな、馬鹿……」

それだけ言って、羞恥を堪えるように再び固く目を瞑った幼馴染みを見つめつつ、遼人

は乳房の隆起に沿って下からブラの中へ手を差し込み、その邪魔な布地をずらす。

露出する、木漏れ日を受けて白く輝く乳肌。桜色の乳首が少し上向きになっているふくらみは、予想していた以上の美しさ。

今までに触れてきた詩音や他の乙女達のものに比べれば小さいが、丁度手の平に収まる大きさのそれは、また違った魅力がある。

触れる指を押し返す、瑞々しい弾力。それを楽しむように指を食い込ませていく。

「くっ、んっ！ はむうっ、んんっ！」

「優しくするから……んっ、はむっ、ちゅばっ、はぁ……」

激しい鼓動が訴える、ツンデレ少女の緊張。何とか落ち着かせようと囁きかけ、今まで以上に激しく舌同士を絡める。

「はむっ、りよ、遼人お……そんなに、キス……んあっ、はんんっ！」

甘く擦れる嬌声と共に、美緒の舌も少年の舌を求めるようにぎこちなく動き始めた。

荒い吐息に混ざって伝わってくる、甘い香り。幼い頃、一緒の布団くまに包まっていた時も、このうっとりする匂いを傍で嗅いだ。

蘇ってきた懐かしい記憶を噛み締めていると、乳房を包む手の中央に硬いものが当たっていることに気づいた。ツンと上向きに尖った可愛らしい肉粒。

半ば無意識の内にそれを指の間で挟み、コリコリと根元を締めて刺激してみる。

「はあくうつ、くああつ！ それえ、はひいつ、いいいつ！」

唇の隙間から漏れた、今まで以上の甲高い嬌声。

ビクビクして手の力を緩め、様子をうかがう。

「大丈夫、美緒？」

「平気……全然、平気！ 何ともない……別に、あんたの指で乳首弄られて、頭がボーっとするくらい感じちゃったとか、そんなことないんだからね……」

こんな時でもツンデレらしい物言いで返してくる、ツインテールの少女。

遠まわしに、今のがよかったと言ってくれているのか。とにかく、感じてくれているのは間違いないと、今度は指先で双方の突起を摘んで刺激してみる。

「なうつ、ふああんつ！ ちょ、んみゆうつ、らあ……ひああ！ 乳首、そ、そこばっかりコリコリい……はひいつ、くうつ、あああんつ！」

急速に硬さを増す肉粒を指の先で強く摘み、左右へねじるように弄ぶ。

少女の小さな肩がその度にビクビクと大げさに震え、重ねた唇の隙間から燃えるように熱く深い吐息が漏れる。

茹るように桃色が濃くなった頬や額には大粒の甘い汗が滲み、わずかに開いたつり気味の瞳は涙で潤み、普段とはまるで違う艶やかな輝きを浮かべていた。

「もおつ、遼人、や、やつぱり……胸、好きなんでしょ。変態い……はふうつ、そんなに

先っぽばかりいじめて……ほ、本当にド変態い！」

「でも、喜んでくれてるみたいだし……ここ、小さくて色も綺麗で……可愛いよ」

「馬鹿、そんな……おっぱい褒められても、嬉しくなんてないんだから！ ううっ」

強気な言葉を咬きながら、ツインテールの幼馴染みは自ら手を少年の肩に回し、貪るよ
うな勢いで唇を重ねてきた。

間髪入れず、今までのお返しとばかりに少年の口内へ積極的に舌を差し入れてくる。

緊張が伝わってくるぎこちない動きで上あごや歯の裏を舐められ、更に唾液を分かちあ
うように、舌に熱く絡みいてきた。

「むぐっ、美緒、激しい……んっ、ちゅぱっ、はあっ……」

「う、うるさい……いいから、は、早く続き！ そろそろ、始めて……急がないと、手
遅れになるかもしれないからあ」

少し切なげに眉をハの字に顰めつつ、黒いニーソックスに包まれた脚を落ち着きなくモ
ゾモゾと擦りあわせるツンデレ少女。

その素直ではないおねだりに応え、遼人は名残惜しさを感じつつ右手を乳房から外し、
スカートの中へと差し込む。

(一々聞いたら、また怒られちゃうよな)

そう心の中で言い訳しつつ、腰の辺りを手で探ってショーツの端を掴むや否や、許可を

取ることもなくいきなり膝の方へずり下ろしていく。

一瞬、瞳の端をキツとつり上げた美緒だったが、抗議の言葉を上げることなく舌を熱く動かし続け、自ら片方ずつ足を上げて脱がしやすいうように手伝ってくれた。

パサリと音を立てて地面に落ちる、ブラと同じ水色の布地。それを合図にしたように、ツインテールの少女は軽く脚を開き、熱っぽく潤んだ瞳で少年を睨みつけてくる。

「ほ、本当に……しちゃう？」

「えっ？ あっ、う、うん。いや、だつて……しないと死んじゃうんだろう、俺達？」

「えっ、あつ、う、うん。そう……死んじゃう。そう……だから、しないと駄目」

確認するように呟きながら、美緒は落ち着きなく視線を左右に動かし、身じろぎする。

土壇場で怖気づいてしまったのか。それを見ていると、再び罪悪感が込み上げてきた。

「ごめんな、美緒。俺が勝手に力使ったばかりに、こんなことになつて」

「今更、謝るな！ どうしようもないんだし……覚悟を決めて、するしかないでしょ。どうしても気になるって言うなら……いい思い出になるように、努力してちょうだい！」

言いよどむ少年へ、恥ずかしそうに視線を外したツンデレ少女が訴える。

「こ、こ、恋人同士みたいに！ うんと甘くて、優しく……幸せな初体験。そんな風に演出して！ あたしも、協力してあげるから……」

伏せられたつり目が潤み、頬は燃えたように赤々と染まっている。思わず抱き締めてし

まいたくなる、愛らしい表情。

何とかこの期待に応えたい。そんな思いが強くなり込みに上げてくる。

「恋人同士って言われても……えっと、わかった。頑張ってみるよ」

ジッパーを下ろして屹立を取り出しながら、具体的にどうしたものか考え込む。

優しく入れるのは当然として、他にどんなことをすれば恋人らしくなるか。

なかなかアイデアが浮かばず悩む少年の前で、美緒はチラチラと視線を下へ向け、再び信号機のように目まぐるしく顔色を変えていた。

「う、嘘。こんなに大きいのか？ 小さい頃と全然違う……あたし、聞いてない！」

小声で呟き、唇を震わせるツインテールの少女。だが、遼人が気づかうように見つめていることに気づくと、ハッと顔を上げ、何事もなかったかのように表情を取り繕う。

生来の強気故か、それとも自分に気をつかわせまいとしているのか。どちらにせよ、そんな姿がいじらしく、とても愛しく思えた。

「……可愛いよ、美緒」

「うにゃっ、な、何よ、急に！」

「あつ……ごめん！ 恋人同士なら、こんな風にイチャイチャするものかなって」

「そ、そう。ううん、いいわ、それで……もつともつと言いなから……して」

ポツと火がつく音が聞こえそうなくらい顔を真っ赤にしながら、美緒はブンブンと長い

ツインテールを揺らして何度も首を縦に振る。

その大げさな反応にますます愛しさを感じながら、遼人は未だ美緒の甘く爽やかなラベランダの匂いが染みついたままの唇を軽く舐め、腰を突き出す。

「可愛いよ、美緒。……だから俺、美緒と一つになりたい」

「……うん。いいよ、きて。あたしの初めて、遼人が奪って。……こ、これは演技！ 演技で言ってるんだからね!! それ、忘れないでよ!」

「わかってるよ。……あんまりしつこく言うとな、雰囲気台なしになるぜ」

念を押してくる幼馴染みへ苦笑しつつ、遼人は右手でスカートの裾を摘み上げ、あらわになった股間へ腰を押しつける。

髪と同じ、日差しを受けて輝く金色の薄い茂み。その奥に隠されている、透明の愛蜜が滴る割れ目へ、赤黒く勃起した肉幹をあてがう。

亀頭に触れる、ヌルリと熱い粘膜。吸いつくような感覚に、一瞬意識が遠のく甘い痺れを味わいながら、ゆっくりと突き進めていく。

「はぎいつ、はあはあくつ、んんつ、あつ、きてるうつ、ひふあああつ!」

ペニスの先の方から、じわじわと熱い膣肉に締めつけられていく。詩音のそことはまた違う、もっときつく強く締めつけてくる肉壺。気を緩めると、あつという間に達してしまいそうな不安を感じつつ突き進んでいると、特に狭まった部分に押し当たった。

「ふあつ、そこお、きて。早く……焦らされると怖いから、い、一気にきて……」

「うん。いくよ……くう、うあつ！」

ミチイツ、ズブズツ、ズッププウツ！

上擦る幼馴染みの声に背を押され、一気にそこを貫く。

「ひぎいつ、んあああつ！ いつ、たあ、あああつ！」

ギユツと固く目を瞑り、苦しげに叫ぶ美緒。

膈壁全体が大きく波打ちながら収縮し、丸く押し広げられた肉口から赤く染まった液体が大量に溢れ出てきた。

自分と幼馴染みがついに繋がった、決定的な証。本当にしてしまったという戸惑いと喜びが同時に込み上げてきて、しばらく動けなくなってしまう。

「はあああ、いいわよ、動いて……最後までしないと、代価代イン代イを払ったことにならない」

それを自分への気づかいと思ったのか。顔を顰めたままのツンデレ少女が、荒く切れる吐息交じりの声で訴えてくる。

その表情と止まらぬ破瓜はかの証を見ていると気が引けるが、蠢く肉壁に屹立を容赦なく刺激され、腰が甘く痺れるような快感は強くなる一方。

「ああ、動くぜ。できるだけ優しくするけど、痛かったら言ってくれよ？」

そう気づかいの言葉を投げかけてから、遼人は理性で抑えられない昂りに強く背を押さ



れ、ゆつくりと抽送を始める。

「にやあつ、ふあんつ！ ひあつ、りよ、遼人おつ、はあつ、くんんつ！」

ぐったりと木の幹にもたれた美緒の口から漏れる、上擦る嬌声。

狭まる肉道を剛直で押し分け、行き止まりが先端の鈴口と衝突する度に、少女の声は急速に甘く蕩けていく。

「美緒、大丈夫？ くあつ、中、ギユウギユウ縮まって……凄い」

「平氣い、これくらい……ひふああつ！ もつと恋人つぼく……激しいのがいい！」

幼馴染みのおねだりに応え、遼人は両手で細くくびれた腰を掴み、そのまま覆いかぶさるように上体を倒し、顔を近づける。

破瓜の痛みと抽送に、早くも意識が朦朧もうろうとしているツンデレ少女。普段の強氣が鳴りを

潜めた愛らしい表情を間近で眺めつつ、啄ばむような優しい口づけを繰り返す。

「ちゅばあつ、はむつ、んつ、ちゅうつ！ 遼人お……はむうつ、んんつ！」

「キスつて、恋人気分が盛り上がると思う……んぐつ、はあ、はむうつ！」

言い訳がましく訴えながら、腰の動きも少しずつ加速させていく。

熱い唇同士が重なる度、ビクビクと電流を流されたように収縮する肉道。隙間なく締めつけられた屹立に耐えがたい肉悦が走り、何も考えられなくなる。

「はひいつ、んつ、遼人、激しい……くひいつ、ああつ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

仙獄学園戦姫

ノブナガツ! comic



信長が、秀吉が、義一が、エツチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学園戦姫ノブナガツ!』がここにある!!

待たせたら

毎月中旬
発売!!

18歳未満の方は
購入できません

18

漫画：老眼
原作：斐之嘉和
キャラクター原案：SAIPACO

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて！

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 11月発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!